

新體
詩集

岩野泡鳴著

闇の盃盤

東京
日高有休堂
發行

5

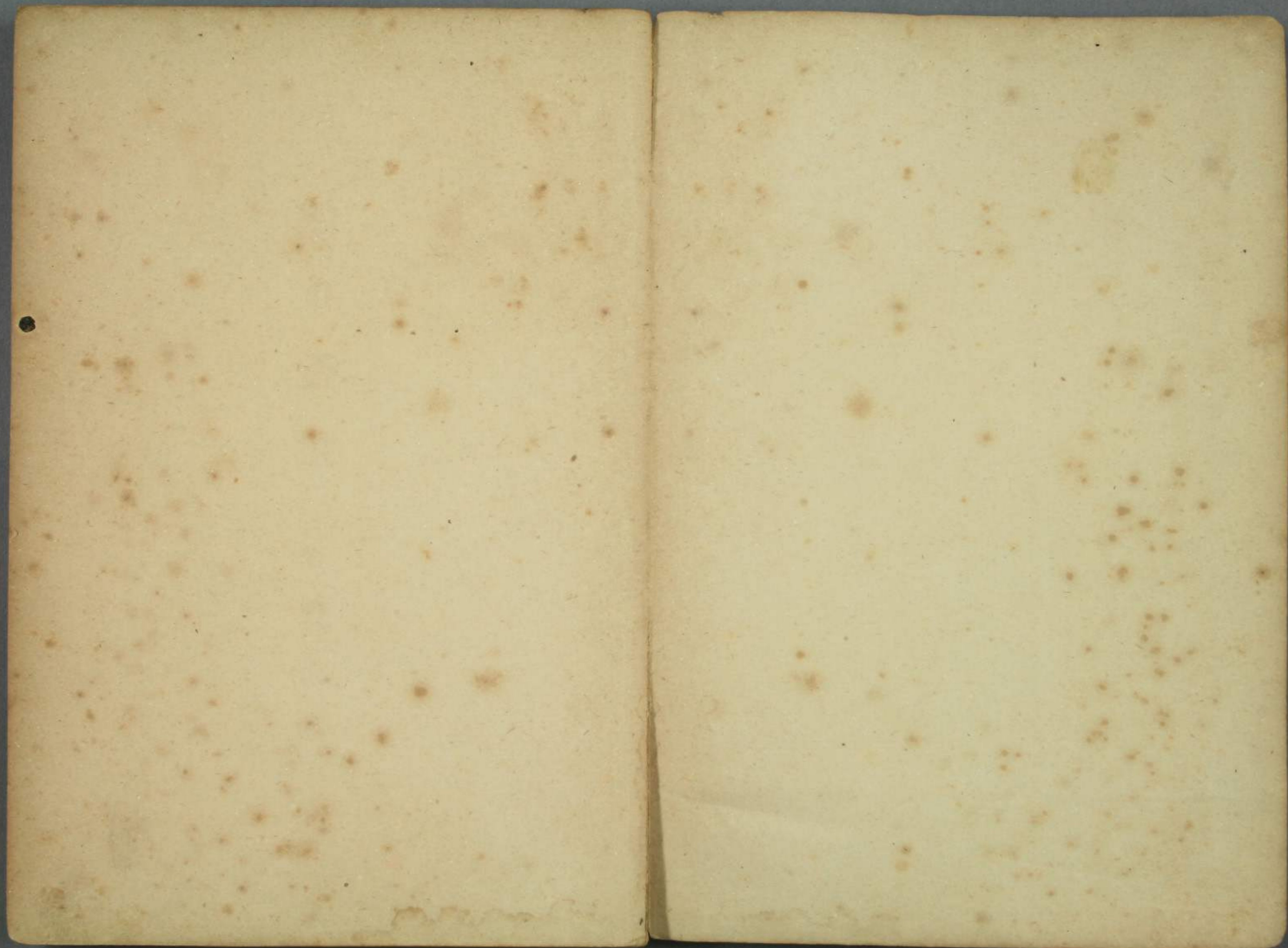
10

15

20

詩新
宋体
閑
の
盃
盃





闇の盃盤
岩野泡鳴

闇の 盃盤 闇を 盛りて、
われは 底なき 闇に 沈む。

(本集第八十一頁)

はしがき

この集に收めたるものは、明治三十八年六月出版のわが第三詩集、『悲戀悲歌』以後の作なり。この間にわが思想と情調とに變遷ありたれど、こと更に之を區別せざりき。紙數の制限あるにより、こゝに收め得ざるも多くあれど、そは次集出版の節にゆづり、兎に角、長短六十篇之をわが第四詩集として公にすることとなしぬ。

闇の盃盤目次

短曲

春曉	二
行く春	四
黄がねくちなは	六
黒き花	八
寧ろ夜なれや	一〇
闇を例へば	一二
闇の闇	一四
闇なる岡	一六

君は暗きを……………一八
 浪の戯れ……………二〇
 冷たき砂……………二三
 よみ返り……………二四
 御靈うぶや……………二六
 過ぐるぬくみ……………二六
 二の無言……………三〇
 黒き素船……………三三
 渦巻く心……………三四
 地なる響……………三六
 千とせの重み……………三六
 あけぼの……………四〇

ゆふぐれ……………四二
 落日……………四四
 樂の音……………四六
 凝りし涙……………四八
 胸のしぶき……………五〇
 光のゆふだち……………五二
 追憶……………五四
 永劫の力……………五六
 のろひ……………五八
 のろひの岩……………六〇
 二つ花藻……………六二
 沖のテチス……………六四

月と猫、其の他

石をいだいて……………六
 細き水の緒……………六
 真白男浪……………七〇
 月と猫……………七二
 わがゆらぎ……………七四
 喘息……………七六
 闇の盃盤……………七六
 朝……………八二
 葉卷のくゆり香……………八五
 酔中吟……………八九
 穂とる君……………九四

女露男露……………一〇〇
 闇中悲歌……………一〇三
 にほひ杉……………一〇八
 男波の小刹那……………一一一
 紅の星……………一一七
 夢はめぐりて……………一二八
 のろひ……………一二〇
 日比谷公園……………一二三
 病室……………一二六
 枯れ葉……………一二九
 中禪寺にて……………一三〇
 この無言……………一三三

海音獨白、其他	一三三
孤寂	一三五
海音獨白	一四〇
ダナエー獨白	一四一
死獸	一四二
人肉狂賣	一四三
凱旋兵	一四四
朱のにじみ	一四五
叙事歌曲	一七〇
黃金鱗	一七五

短 曲 (三十五篇)

春 曉

またも 思ひ に なやむ 日こそ
來ぬれ、板戸の ひまを 漏れて。
白む 臥所に 夢のかをり、
残る 暖み つつむ われや。

寧ろ このまま 眠り入らば、
死をも 知らずに 世こそ 變はれ。

覺むる 心は 苦をも 招き、
苦をば いただきて 男泣きす。

人の 知らざる 憂ひ 多し、
身をば 起さん 力失せつ。
白む 臥所に 夢のかをり、
ゆるむ 節々花を 開く。

春の あしたの ねむりごち、
いまだ 生れぬ 身にも あれや。

行く春

春の行きにし跡を追ひて、
われは出で来ぬ森の樹かげ、
朝日寂しく光投げて、
陰府に結べる夢の世界。
青葉顫ひて息を凝らし、
小徑をののく露は繁し。
あはれ、その露色も清ら、

昨夜まみえし戀のまなこ。

ランプ緑りの部屋も浮きて、
中に見え透く罪のふたり。
それと一人をいただき寄せば、
影よ、まぼろし——胸にわが手。
春ぞ行きける、露ぞ繁き、
草葉踏みかね、われは覺めぬ。

黄がねくちなは

月つきは更あけたり、眠ねむる草くさを
静しずかに縫ぬいひ来て光ひかる君きみよ、
黄こがねくちなはかげにばかり
音ねをば曳ひきつつ夢ゆめに入りぬ。

床とこはぬくめる闇やみの樂らく士し、
花はなは頻しきりて、花はなは降りて、

痿なえしわが身みは痿なえし腕うでに
痿なえし長物ながもの捲まきてあるを――

せめてこのまま土つちに籠こもり、
土つちに隠かくれて行ゆかば如何いかに、
斯かる戀路こいぢの君きみとわれと。

君きみはくちなは――されどゆかし――
月つきと消きえ行く翌あしたる朝あさは、
人ひとにかしづく人ひとの妻つまよ。

黒き花

(妻を失へる老人に)

黒き流はみなぎりて、
黒き影をば浮べたり。
浮ぶ姿は見えねども、
まなこつぶればありありと
ありし昔のおもひ出や、
うれひに映る愛の花。

若きかをりに返るほど、
深きに沈むその花や、
底なき淵の闇ぬけて、
隠れ行きしか、しほれしか。
残るひとり胸は、ただ、
うつろとなりてみなぎりぬ――
黒きかをりの黒き影、
さらに黒きを増すばかり。

寧ろ夜なれや

「肉にくを洗あへ」と曉あけの波なみの
遠とほき響ひびを近ちかく聴きけば、
みどり 淀よどみて 解とけし 魂たまの
かをり ゆかしく われを 打うちて、
眠ねむり心こころの目めこそ 覺さむれ、
九里くりの 海うみ岸がし いまだ 狭さ霧ぎり
かすむ 中なかより、白しろき 七し五ご三さん や――

これぞ、ねぢれ も 荒あく 延のびて、
御み靈たま「深ふかみ」の 秘ひ義ぎを 圍かこむ。

斯かくも 夜よあけ は つらき ものか、
われと 海うみと を 二ふたつ 分わけて、
われを 小こさく 目め覺さめしむる。
寧ねろ 夜よなれや、とこしなへに
夢ゆめを われ等らは 一いつに なさん。

闇を例へば

闇を例へば、海の主の
涌きて夜ぞらの星を凌ぎ、
足は大地のかけを踏めど、
その手は二つは空に延びて、
來たるものをば待てる如し。
さなり、わが世はそれの下に

咲きてにほへる夢の園生。
むしろ覺めざれ、戀も花も
とはのかをりに笑みてあらん。
光照りなば、花の露も
戀の生命もしほれ行きて、
あはれ、短き榮えを見じや。

夜るぞわが身をいだくとてか、
肉のまなこを暗ましむる。

闇の闇

あまつ鏡の空を落ちて
千々に砕けし缺けら一つ、
われはちいさく闇に照りて
映す御影を、神よ、知るや。
北に住ひて磨く星の
凄きまたゝき、それにあらず。
遠き沖らの磯に燃えて

罔象 かがぐる 火 かも、あらず。

いともの寂たる海のほとり、
われの光は鐘を隠し、
砂の奥なる熱を追ひて、
過ぎし百世の跡を戀ふる。
生きて死ぬるに何の恨み、
「今」を映せや闇の闇に。

闇なる岡

目をば閉ぢて思へば、
あはれ、親しこの闇、
肉をさそふ物みな
こゝに云はゞ口蝮、
時雨晴れし青野を
ぬめり行きて、ああ、神、

われに残るたゞこれ
遠く響く泡浪。

それか、あらず——聴えて
胸に満つる靈の香、
天は深く薫りて、
足場高きこの岡、
光若しも涌き來て
照らば、やがて世の外。

君は暗きを

君は暗きを おそれ給ひ、
世なる光に出づとすれど、
おもへ、手に手をこゝに飾る
戀の花束、糸は切れて、
乾れし地のへにしほむ時ぞ。

君が御口を漏るゝ笑みの

日中咲きなば、やがて移る
弱きをみな末も見えて、
をこころは鐵と冷えん――
闇は晝より、肉は靈に、
勝る秘密のなからましや。

とはも斯くこそ――愛しき君よ、
それとかをりを探り寄りて、
今を燃え立つ熱と熱と。

浪の戯れ

濱は拾里の床を延べて、
こよひ迎ふる客もなきや。
波元白浪横に長く、
銀の細聲消えて起り、
瑠璃と散りぼふ海の子等は
おめず、臆せず、むつれ遊ぶ。

すくと高まるうねの上に

純金を刻める裸形をのこ、
さつと落ち来るおもに浮きて
玉を磨ける亂髪をとめ、
ほくそ笑みつゝ見えて消えぬ。

こゝろ寂しきわれも、今は、
海の御魂に透きて立つや、
またもかれ等は出でておちず。

冷たき砂

ゆふべ 冷たき 砂に 坐わり、
天を 仰げば、いまだ 星の
るめる 姿は 一も 見えず、
青き色 のみ 上に 下に
なやむ わが身 を つゝむ 世界。

昔し 失せにし人の 戀の

恨み、歎きか、海の響
胸の奥にも 絶えず 継ぎて、
廣き 濱邊ぞ 身をば 責むる。
われは 十年 罪を 悔いて、
こゝに 初めて 君に 詫ぶる。
骨は 褴すとも、心のみは、
君よ、眞一度 陰府を 出でて、
清き ほゝるみ われに 示せ。

よみ返り

夢のまくらに闇を響く
波よ、亡者のよみ返りか。
神は地塊の軸に觸れて、
陰府の柱は根よりゆるぎ、
底つ石棺蓋は開きて、
而も歡喜の叫びばかり――
黒きころもに靈を包み、

今か、光明仰ぎのぼる。

あはれ、そのかげ聲と共に
天の御中に進み行くや、
遠きわらひの續くひまに、
またも真近き鯨波ぞ起る。
肉の小部屋に籠り聽けば、
魂は幾萬海を振ふ。

御靈うぶや

うごめくはこれ何者ぞ、
牢獄に等しき闇を——
ひとつかたとまなこ据うれば、
その數は増して行くなり。
まとへるぞみな墨ごるも——
黒法師——無爲の行列。
暗きより暗きに入りて、

かへり見る光だになし。

わが靈のなやむ産屋か。
相向ふかゝみの法師、
相映り、幾多生まるゝ、
代のかげの並ぶその脊よ。
その脊をばいくつ越ゆとも、
この無言、つひに死ぞなき。

過ぐるぬくみ

君はわが手をい避け給ふ、

まこと戀にはありやえらび。

こ世のすがたを受くる先し、

知るや、真やみぞ世界なりき。

魂は——こゝろを狭く限る

室のなければ——觸るゝところ、

そこに乃ちものをいだき、
過ぐるぬくみをたどり合ひぬ。

その子、その子はやゝに分れ、
かゝる光のもとに來たり、
木とも、獸とも、身とも見えて、
かほは互ひに知らぬばかり。

君も、さあれば、かたち攀ちて、
もとのぬくみを共に得ばや。

二の無言

ああ、君、まなこの光を去れよ、
きらめく世界は死のおもてのみ。
相見しおもひ出かたちを焼けば、
飛びかふ言葉の羽をさへ借らじ。
魂もて相戀ふ——これ、二の無言——
おもへば、真やみの定めをあゆむ。

まことの戀——ああ、いましとわれと

異なる耳あり——その足音を
攻め入る魔としも互ひに聴くか。
こゝろのおそれは肉をも振ひ、
暗きを直ちに手と手をひとつ。

ああ、君、刹那ぞ、この刹那ぞや。
無言に住する常世の蜜は
斯くこそ過ぐなれ、ふたりの胸を。

黒き素船

黒き素船を透かし見れば、
砂にしやがめる影とまがひ。
沖の小島の薄き見れば、
人の思ひに沈むけはひ。
空に住へる月を仰ぎ、
寂びしわが身の魂と見たり。

われはそのまままなこ閉ぢて、
消ゆる世界を今ぞいただく。

浮けよ、沈めよ、千々のなやみ、
千々の悲み、身をば乗せて。
苦なるいのちは――繁き矢なり――
積みて重なる夢の小船。
さして行くへをこゝに問はじ、
この夜、この時われは活きん。

渦巻く心

闇の鳥に聲もあらば、
暗き地獄の窓を開けん。
斯くも思ひに沈む「今」を
われに奪はんものはありや。
鐵のうるしに固く閉ちて、
神の嘉せし光さへも、

見よや、こゝには影もなく、
靈ぞエーテルかをり高き。

胸のうちこそ元の世界、
日をも星をも生まば生まん。
燃えてうづ巻く心ありて、
物を形取るひ々き包む。
燃えよ、わが靈戀の如く、
われを焼きてもわれはあるを。

地なる響

暗き濱邊をたどり來たり、
水際眞近く砂を握る。
握る眞砂のもろきうちに、
闇の力はその尾振ひ、
手をばつたひて胸に響く。

君よ、御空の星を説きて、
地なるひびきを忘る勿れ。

遠き深みの浪は寄せて、
幾重打ちては疊む砂ぞ。
たとへもろくぞ碎け去りて、
手には残れる形なくも、
永劫の憂ひを布くは如何に。

暗き濱邊に砂を握り、
君に云ふべき事ぞ多き。

千とせの重み

ああ、この楠の木、真直ぐに延びて、
天をば窺きしその罪ゆるか、
斯くまで曲りて、斯くまでくづれ——
病者のさまなり——肌への苦も
苦悶の血あせににじみて朽ちぬ。
野望に生ひ立つ、その活く幹の
飽くまでもたげしかしらは折れて、

千とせの重みやいち時に受けし。

劫果の破壊——こは、わが世の苦をば
却つて全くぬぐはんものぞ——
かれ、こを拒みて身づから忍び、
(サタンか)死力の限りを盡し、
なほ且はびこるふと枝をわれは
仰ぎて、新たな力を得たり。

あけぼの

いとねむげの浪は先づ覺めて、
陸と海とこゝに分れ初め、
海と空と沖べに連る。
遠く近く浮ぶ帆かけ船、
眞帆を揚げてさ走る進みの
いとゆるやか、夜こそあけ離れ、

海のつばめ——こは朝の使——
軽く飛びて、世の目覺め果てぬ。

砂山なる砂を萌え出で、
露を帯べる小草薄みどり、
深み淵の色に照り添ひて、
わが心の、これや、苦なき時。
亡びんにも亡ぶ影見えす、
活くるにまた活くる惱みなし。

ゆふぐれ

人げもなき濱のゆふ暮は
死かげの谷陰府に似たるかな。
雲は幾重、横にまた縦に、
王閻摩羅、瓊矛の頻投げ、
青き空にそりたる細太刀、
脊なる山は低く、柳引きて

寂びし靈の逃げ去るを圍み、
目をあぐればこれ淀める淵

飛び行くにも光の羽根なく、
傳ひ行くにつながる島なし。
風は静か浪の穂を揺りて、
わが生命の末を示すのみ。
今か此世はたとへ消ゆるとも、
この寂びこそ活くる道あらめ。

落日

むかし 御神の命を受けて
此世を領せし、あまつ産の
それの如くや、御座は落ちて、
光まばゆき 黄金ぶすま、
雲は静かに 浄を圍み、
残る衆生の のぞみ 吸ひて、

銀の鏡の音も なくに、
あはれ、世の日は 舞ひて 沈む。

斯くも 赫耀 淨に入る日、
放つ その矢の 一つだにも
焦れ渡らん 影は 失せて、
有るは 親しき 闇の 深み。
暗き 中より 浪を 聴けば、
純の 黄金の 榮えぞ はゆき。

樂の音

高きより落つる樂のね、
君や揺るむらさきの幕
ねちれ立つ段階のもと、
われはたゞちいさき虫か。
戀のみにこゝろ引かれて、
ゴス式の窓も小暗く、
色がらす赤また青に、

わが胸はうたれてなやむ。

そのなやむちさき胸こそ、
今にして、嚴たる御堂――
『ハレルヤ』の聲に、わが戀ふ
御すがたよ、神と浮べど、
かの御手にきらめく指輪、
持ちぬしは既にありけり。

凝りし涙

海のおもてを渡り來たる、
白き男浪の音ぞ愛しき。
われに乙女の腕もあらば、
堅く擁きて、共に共に
消えて千尋を恐ぶべきを。
われは磯邊にうづくまりて、
北を受けたる岩に似たり。

右も左も此世の風の
吹くがまにまに心荒れて、
憂きが上にも憂きを重ね、
凝りし涙ぞ斯くは高き。

あはれ、男浪よ、われは男、
なれを友としこゝに立てば、
すさぶ胸にも愛は涌き來。

胸のしぶき

君と暗きにつれ立ち行かば、
なほもこの手を避け給はんや
神の光は御冬の濱か、
われらふたりを砂上に竦め、
黒く並べる寒影法師。

たゞにその影隔つる晝は、

戀を呪ひの悪魔の巢なり。

われは、君なる羽がひのもとに、

寧ろ御靈のぬくみを得ばや。

君は、然れども、定めありと、

おぞや、御ごゝる太陽に憚りて、

岩に繁吹ける波にも似たり。

胸の夜のしぶきは
火焔と燃ゆる。
ひびきに沸き立つ潮ぞ、

光のゆふだち

ああ、初島、南 向ける 島、
今か その目 覚めたる ありさま。
黒き潮 にかしら を もたげて、
低き身 にも 罪 をや 拂へる。
いまだ 戸ざす 灰色濃雲 は
既に 高き 日かげ を 見せねど、
雲間 よりぞ 降り来る 金じき、

時に あらず 光 の ゆふだち。

此世 は 寒き 御冬の よそほひ、
波の穂 をも 雪か と まがへど、
ああ、初島、南 向ける 島、
かゝる あした 覺むる子 さち あれ
射照り そゝぐ 朝日の 雨あし、
これや 聖き 救ひ の かんむり。

追憶

むかし 別れし 君の 影は
若き光を 髪に 湛へ、
市の 真中に われを 呼びて、
『来たれ、いまし を 母と 共に
尋ね わびぬ』と、 熱き 涙

われに 冷えたる 胸は 踊り、

もとの 情けの 火こそ 燃ゆれ。
引くが まにまに 追ひて 行けば、
古き 冠木の 門は あらず。
家に 坐われば、 知らぬ 床に
知らぬ いろ香の 花を 活けて、
母も その娘も すがた 消えぬ。

あはれ、 夢なり | 古き 愛よ、
十とせ その身を 今は 如何に。

永劫の力

あはれ、御空の 一つ星、
戀しの 君は いくこぞや。
共に 波元に 手を取って、
なれに 誓ひし 樂しみも、
今は 覺めたる 夢うつつ。

その 初戀の おもひ出は、
夕べの 波と もる共に、

なれに 響きて のぼれども、
胸に 答への なければか、
われは あまたの 愛乙女に、
または 稀なる 人妻に、
おもひを 寄せて なやむ身ぞ。

戀には 二つ あるべしや、
なやむは 永劫の ちからなり。

のろひ

闇やみに手てあり、幾多いくたの
生せいををもとめ、偶々たま
君きみが胸むねにやどりぬ、
無為むゐに飽あけるその魂たま。
狭せまき獄舎ごくやにありて、
斯かくやもがくその身みを。

『世よにもをどり 出いでなば、
さらに延のさん いのち緒つ』

されど、來きなば、光ひかりに
こゝろ先まづは縮ちぢまん。
斯かくて、かしらもたげて、
明あき御空みそらのろはん。

呪のろひにこそ、あこがれ、
闇やみのちから活いくなれ。

のろひの岩

北きたに 黒雲くろくも 涌わきて 出いでば、
海うみの あらしと 漁夫ぎよふは 免のがる。
君きみを 見初みぞめて こゝに 三さんとせ、
戀こひの うれひは 廣ひろき胸むねの
浪なみを 無言むごんに 荒あれて 渡わたる。

斯かくて 死しぬべき 身みにし あらば、
むしろ この世よの 苦くをも 焼やきて、

残のこる思おもひは 沖おきのおもに
一いっつ小こ高たかく 深ふかみ 抜ぬけて、
青あおき 寂さびしみ 君きみを 招まねき、
君きみを 咒のろひて 岩いはと 爲なさん。

されど、人妻ひとつま、 近ちかく 見みては、
三さんとせ 言葉ことばを 知しらぬ 風かぜに
われは 吹ふかれて、 深ふかく 活いきん。

二つ花藻

君とふたりし、濱のゆふべ、
波に巻かれて海に入りぬ。
そこも波あり、濱もありて、
靡く磯風——戀のいぶき——
かしら渡りつ、袖を拂ひ、
深く染み入る靈のかをり。

青き光に青きながめ、
われら藻のごと石に立ちて、
二つ並べる影は無言——
近く神秘の岸は開け、
さらにか青き岸を迎ふ。
君とわれとは永切に斯くや、
即かず離れぬ二つ花藻、
つねに沈思の底に醒むる。

沖のテチス

夕べ 繪ぎぬに 藍を 溶きて、
遠く 延べたる 海の 真中、
天に 小高く かしら 上げて、
ひとり 暮れ行く 烏帽子岩 よ。
白き 泡浪 裾を めぐり、
音も ゆるがぬ しぐま住ひ。

なれを 遙かに 一つ星の

青き またたき、それも 落ちず。
草の つゆ なく、花の香 なく、
寂し心の —これや、いのち。
夢は 深みの 底に 入りて、
育て来たらん 玉は 何ぞ。

沖の テチスは 月を 孕み、
深き 眞やみに 沈み行くよ。

石をいだいて

石を いだいて、われは 眠る。
夢に 遠波 遠く 寄せて、
白き 眞砂 の うへ を 洗ひ、
青き 草葉 の 道 を 濡らし、
高き 深山 の 裾 に 入みて、
本々の 樹すゑ は 朱に 染まり、
谷と 谷との もだし合ひて、

深き 秘密 は かげ を 照らす。

それよ、 しぐれの の 過ぎし 跡ぞ、
冷えて 覺めたる 旅 の ひと夜、
あさ日 寂び照る 石 の うへに
落つる なみだ も 血しほ 爲して、
秋は 身を 切る 亂れ 焼き及、
盡きぬ いのち を 痛ましむる。

細き水の緒

曾て、君、あたゝか なりし
おもかげよ、秋野の するか。
萩は 散り、すゝきは 立ちて、
悲しみの 風ぞ 西北。
一もとの 樹より そよぎて、
その 蔭の うら寂ぶ 野路、
枝を 分け、枯れ葉 踏み行き、

われは 今胸の 思ひ出。

野は 盡きて おもひは 盡さず、
戀は また 速き 流れか。
近ひく 琴のね 止みて、
白絹の ほそき 水の緒――
石のへに 見る 夢の ごと、
わが秋は 暮れて 行く なり。

眞白男浪

(寒き濱邊に立ちて米野口君の南遊を思ふ)

友よ、旅路は椰子の樹かげ、
暑き葉ぶきののむろを出で、
幾代寂びれし一つ島の
磯にしば打つ眞白男浪――
君や、身づから詩とぞ碎け、
こなた小寒の濱に通ふ。

遠く南の風はぬるみ、
あはれ、島かげいとも無言。
夢のまなこを過ぐる如く、
うすら縁のすそを引きて、
君がこゝろは胸に響く。
これぞまぼろしうつゝながら、
友よ、互ひの聲を離れ、
しばし自然の寂びに飽かん。

月と猫、外貳拾篇

月と猫

櫛の樹の間を漏る月の影は、ふるひて、座に落ちぬ。

誰がゑみまけし魂の
かた碎けぞと、そも小猫

白き小猫は走り来て、

ただつくねんと見守りぬ。

泡とつぶ立ち、玉と散り、
散りてはつどふその碎け。

白き小猫はざればみて、
つかむとすれば手を照りぬ。

月と猫とは、その夜より、
わが座を和す靈なりき。

わがゆらぎ

暗き日くらきひと明き夜あきよは、今いま、
さぬころも受けつぐははひ、

一日いちにちの物ものもひづかれ、
さし引きは空そらしき袖そでか。

堀端ほりはたの枯葉かたはやなぎの

ちからなく さやぐ ゆふぐれ。

その さやぎ 胸むねに 渡りて、
わが心こころ いづれの 影かげぞ。

水みづぞら を さへぎる 枝えだか、
水の面おもてに 黒くろめる 幹みきか。

暗くらき日ひと 明あかき夜よは、今いま、
目めまどひ や 胸むねの くるめき。

たそがれは 迫り來りて、
われのみ の ゆらぎぞ 残る。

喘息

苦しき まゝに
ふと わが目を さます——
小ぐらき 寐間の
小ランプ くるめきて、

その いきざし
今は た 迫り來つ

たゞ じりくと
あぶらを 養る息は、

油煙に せび、
燃えさす その光。
くらむと 見れば、
一咳 胸を 突き。

喉もとまでも

いのち は こみ上り、

血は くつ返る

刹那ぞ なつかしき――

わが世は さめて、

わが世を いただく時。

闇の盃盤

夢は 失せにし 玉の 如く、

覺めて 掴む と すれど、あはれ。

艶も 光も 跡を 絶ちて、

闇に のべたる 片手 ばかり。

ゆるむ 節々 ちから 添はず、

戀も のぞみも なかば うつゝ。

まなこ 開らけば、暗き かもゐ、

あやし まばらし これを めぐる。

鬼よ、羅刹よ、夜叉の首よ、
われを夜伽の霊の影か。

死はもわが身を獄につなぎ、
肉は魂とも燃えてのぼる。

見えぬ火の中、水の中の
畏怖と威嚇は迫り來れど、

酒のかをりに泡のいのち、
甘き歡樂ねむり誘ふ。

闇の盃盤闇を盛りて、
われは底なき闇に沈む。

かくて夢より夢を浮び、
とこしなへにも生に酔はん。

朝

おもひ惱みの夜を過ぎて、
呼ぶ聲ありとまよひ出つ。

(かしらに細月の
たゞ消え残る雲の影。)

われや空なるあこがれの
もぬけの門を見張り人。

ゆん手の御寺より、
うち出す鐘も夢の聲。

胸の透垣透き通り、
見ゆるは君のすがたのみ。

(濱邊の路草に
いとたゆげなる露の目見。)

われは疲れぬ、けふも、亦、
空しき戀をいだきつ。

(踏み行く 海路 より、
日ぞ さら、かに 登りける。)

重き この身 を、君 ならで、
やすむる 御手 の あるべしや。
(ああ、また、松原 に
わが世 を 歎く 朝は 来ぬ)

葉巻のくゆり香

ひそかに 君が
つけたる 巻煙草、
葉巻 の くゆり
この身 に 染めて より、
かさねて 飽かぬ
出會ひ の 苦しき 上。

よそ目を避けて
會ふ度毎に君
熱る、胸の
ほむらを訴ふとも、
別れし跡よ、
思へば、人の妻

獨りしあれば、
いよいよなつかしや、
くゆらす煙の

中より見え來なる
くちびる燃えて、
ひとみを凝らす人。

眉間の色香
拂へど、妄執か
知力を巻きて
覺むれば、且、凍り、
紅蓮の熱は
身を焼く阿鼻地獄。

罪 呼ぶ聲は

底より響くとも、

はだへは裂けて、

血しほぞ踊るわれ、

君もて遊ぶ。

君、われもて遊ぶ。

互ひのいのち

今更ら惜まれて、

苦しむひまを

楽しき夢の世ぞ。

戀こそ籠れ、

葉巻のくゆり香や。

醉中吟

四疊半、酒の香こもり、

蠟燭の光は暗く

また、きて、ねむりを誘ふ。

黒檀の艶——南國を
忍ばすか——潤み帯ぶるは、
三の絲切れし細棹。

そを執らん力も添はず、
歌ひ女は柱に寄りて、
酔中の淨にや入れる。

いそがしくめぐる眸も、

今はたゞ伏し目に隠れ、
さながらや安坐の佛。

手向けたる金ぶち猪口の
底にして、照らす名文字ぞ
酌ぎ足せし酒にゆらげる。

奇しきは猪口か、その名か。
黄がねなすあまきしづくを
飲みほせば、花降り來たる。

降る花は白き曼陀羅華——
その毒に染みてや、わが目
くれなるの燃ゆる色あり。

その色の消え去る闇に、
芥子粒の圓きたましひ
あつまりて、巨靈と見えき。

その跡につづくは黒き

ころも數——これ、「悲み」ぞ——
手を垂れて、よよと泣き行く。

暗やみぞ——また、その跡を
音もなく追ひ來る菩薩、
「ほゝるみ」の蓮華に乗れり。

「これなり」と、われは叫びて、
高飛ぶや、餓ゑたる鷺鳥、
「救へよ」と、身もてすがりぬ。

「君も亦酔へり」と、答詞——
ながむれば、かをりゆかしき
歌ひ女の膝にありけり。

一
褻とる君

褻とる君の
足音は、深山邊の

奥なる杉の
林に闇を俯せ、
黒がねとざす
めぐりを脊屈みて、
落ち葉の上を
抜き差す狼の——

それかも、暗き
高樹の樹するより、
したたり落つる

夜つゆもをのゝきて――
たゞさへ、かゝる
折には、身に入むを――
と絶えて、跡の
ときめく胸の寂び。

褻とる君の
しのびは、墨染めの
死とこそ響け。
されども、しめやぎて――

まさ夢くる、
軋れば、酔ひごゝち。
手に手に、森の
香をこそさぐり寄れ。

二

褻とる君の
別れは、燭臺の
火は燃え行きて、
流るゝ蜜蠟の

名残なごりは凍りこぼ、

そのかみ、水盤すいばんに

油あぶらの玉たまの

水漬みづきをおもひ出での――

それかも、胸むねの

秘密ひみつをあばかれて

かばひも得えせず、

こゝろは引ひかれつゝ、

再またび會あはん

たよりの無なきが如ごと、

わが身みは全まく

冷ひえたるうるし闇やみ。

裊つまとる君きみの

足音あしおとは野狐のぎよの

逃にぐるとと聽きゆ。

されども、慕したはしく――

おもひのくるゝ

閉とづれば、きぬぎぬの

痛まし。ふたり、
世をこそ隔つらめ。

女露男露

ゆふ立ち 晴れし
御空のおもてをば、
青みは重く
電絲にたるみあり。

その線づたひ
走るは露ひとつ、

『真中にとまり、
孕みの機を待たん。』

ちいさき胸の
きらめき散らぬ間を、
『やよ、待て、しばし』
と、露のまた一つ。

「一なる 女魂、
なが身の 秘め力
許せよ、共に
短き ながめ ぞや。」

「二の魂、わが脊、
君、若し そを 知らば、
われらの 望み
今こそ 満ち足らめ。」

渠等 は、斯くて、
ひとつに 煌めきぬ。
落ちし は 二つ、
消え行く 元の露。

闇中悲歌

ああ、闇の矢よ、
うつろの 胸を 射て、
その數 あまた、
抜きさす 餘地 も なし。

われ、針ねすみ、
針みな逆生えて、
まろべば深き
痛手のの疼くのみ。

楽しき小夢
その影晝の間の
光と消えて、
こゝろはうるし室。

戸ざせる窓の
しめりは黒くして、
暗きに乾く
御霊の見ゆべしや。

苦しき肉の
癢ひ目をしぼりづる
涙や、實にも、
やみ夜の闇映す。

神かみら は 亡ほろび、
望のぞみ も 失うせし 世よぞ、
おのれ を 追おひて
生いき死しぬ 物ものの 呼い吸き |

はじめの 呼よびに
潜ひそめる 獸け 動うごき、
次つぎなる 吸ひき に
むくろ は 開ひらけつゝ。

あ、この 闇やみに
醒さめたる われ は あり、
刹せつ那なに つゞく
死しの 苦くを こそ 思おもへ。

隣となりの 水すい車しゃ
かたこと 音おと絶たえず、
わが 胸むね 深ふかく
悲ひ痛つらを 刻きざむ なり。

にほひ杉

大谷川 行く水 早く
さそふとも、御空に 高ら、
いや増しに さかゆる 杉よ。

數百年、數百の 幹は
御山邊の 坂と もろとも
延び立ちて、御やしろ 深し。

奇し御魂、神秘の 闇を
高ら枝の しげみ 蔽ひて、
鼻さきを のぼる いし段。

つち 近く 人は 這ひつゝ、
いつまでか 暗き さまよひ――
而も なほ あゆむ と 見るや。

思へ、この 木々の 親さへ

印度にはすでに倒れて、
その影を奈落より引く。

わが足の音とも見えず、
こつこつと物かのけはひ—
たゝずむは『をのゝき』なりき。

時こそは如法暗黒、
樹の間より漏り来る星の
光ともにはふは何ぞ。

今や、われ、犬なる人か。
おぞけ立ち、夜つゆを浴びて、
暖國のきざしに酔ひぬ。

男浪の小刹那

物おもふ
まなこに開らけつ、
寄せ來たる
男浪の小刹那。

遠つ海とほみの

奥おくなるひゞきを

揚あぐるかや、

寂さびしき目の前まへ。

いと白しろき

うねりは――力ちからぞ――

青あおよどむ

そらをも乗のせたり。

七重しちゑ八重はちゑ

その道みち折をれ來きて、

おほ地ちの

御胸みむねを打うつなり。

その音ねは

虚空こゝろをめぐりて、

わが身みはも

立たてるは釣つり殿とら。

この地球、
つちより 亡ばゞ、
なれ、海に
増すらん 秘密ぞ。
わが戀を、
はた、わが 望みを
はぐ、まん
沖べの ふる郷。

いにしへの
テチスが 住ひも、
實に 今は
ひそみて、わが胸。
吹き渡たる
大氣に ゑぐりて、
真空を
いだける この生。

湧き返る

いのちを仰へて、

今こゝに

御靈に向へば、

物思ふ

まなこに開らけつ、

寄せ來たる

男浪の小刹那

紅の星

闇を落ち來る紅の星よ、

根なく、榮えなく、光あらず。

枯れてしほみし世々の地塊、

繁くつゞきて目をば横ぎる。

あはれ、その道風を起し、

音は遠きを引いて叫ぶ。

畏怖と威嚇は渦と残り、
覺めしわが魂夢とめぐる。

われは生々、ここに振ひ、
星の行くゑに耳を開らく。

夢はめぐりて

川夢はめぐりて花と咲きぬ、
川のつゝみの目ざましさよ。

曉の夜羽根は水に流れ、
残るかすみは枝にゆらぐ。

示めせ姿を、鳳の鳥よ、
ゆふべ見えしは尾羽の破ぶれ。

われはそのごと常に破れて、

かをる 光ひかりの 裾すそに 迷まよふ。

あはれ、この花はな ねむる ままに、
春はると 散ちらばや 戀こひも、魂たまも。

のろひ

君きみより 得えてし

愛あいの根ね ありとせば、

わが世よは 直すぐに

のびけん くるま菊きく。

君きみ あり 方かたを

日ひなたと 向むき直なほり、

黄こがねの 花はなは

おほ輪わに 咲さきけんを。

しのびの魔ま ゆゑ

根ね さへも 抜ぬき取とられ、

つめたき 闇くらは

わが世よを 飢うやすのみ。

なさけの かたる、
かたちを かけ消しぬ――
氷と 冷えて、
のろひは 君まよふ。

今 人妻の
苦しき うべなれど、
そは 見殺さん――
わが身の 苦を 知れや。

日比谷公園

あはれは あれど、
そと だに 近よれず、
年増の 威厳
噴水 あとに 消ゆ。

響くは かなた
管樂 オペラの 曲、

いとしめやぎて
市中を雨に呼ぶ。

松本樓に

あつ物すする客

顔赤くして、

秋雨酔ひを帯ぶ。

日比谷の秋の

香にこそしのばるれ、

かのまよはしの
えまひのおもかげや。

胸にし秘めて、

公園もあゆまるる。

見え来ば君を、

されども、唾に吐かん。

病室

あざけりの
悪魔あり、
かしらを蹴つと目はさめぬ。

闇夜なり、
狭き室、
枕にかよふ息ばかり。

寝がへれば、
いち道の
光まばゆく輝きぬ。

そのかげに、
わが戀の
姿もちらと浮びける。

束の間ぞ、

ただ しばし、
思ひ出 こそは 親しけれ。

身は やがて
朽ち行かん、
ただ 惜まるる 息の色。

紫むらさきに
朱しゅを 點てんじ、
そはも 沃度わくどの にほひ なる。

枯れ葉

枯れ葉 にも 魂たまは ありける、
静しづかなる 空そらを 花蝶はなてつ。

とりどりに 舞まひつ、 纏まとひつ、
音ねを しのぶ 別わかれの 歎なげき。

高幹たかみきの 枝えだに さかりて、

沈み行く二の世やいつこ。

ひとつ枝にまたと見まじを、
親しみは苦の穂すゑのみ。

中禪寺にて

黒くよどめる水のおも、
油を延べし海の如。

ひたり、ひたりと艚になづむ、
音さへおもきわがこゝろ。

遠く君より離れ来て、
暮れ行くけふの寂しさよ。

舟の行くゑに引かれては、
わが身も消えて入るおもひ。

この無言

ああ、もみぢ葉は、死の川の
黒きに染みて、沈みけり。

その黒染めの深淵を
くゞり行きけん、眞すがたよ。

世の秋風は寒くして、
手には残れるこの無言。

孤寂

(夫人を失へる人に代りて)

庭の青葉の静かげに
呼ぶ聲ありと立ち出でぬ。

呼ぶ聲見えす、この孤寂、
わがまぼろしは破れつゝ。

陰府まで暗く透き通る、

その 思ひ出 の 心ながれ。

去りにし 花の 小姿を
それぞと 抱く よしもなし。

海音獨白、外五篇

海音獨白

父には 捨てられ、母には 別れ、

物乞ふ 袋と 共に まろび、

或村は づれの 山根に、ひとり

甘乳の 流れを 呼べど 出です。

稚きころは 七島、八島、

伊豆 吹く いなさ の 風を 痛み、

どよめる 海邊の 小浪に つれて、
消え行く 身なりき — 今は 昔

二

べに貝、小砂の しめれる 道を、
かもめの 足跡 かく 踏みて、
たまたま 過ぎ行く 托鉢和尚、
我慾と おのれは 空し 眞袖、
無垢衣の ひらめく 両手を 延べて、
拾ひし 珍貝 紅に あらず、

つゞれに まつはれ その世を 叫ぶ、
ああ、わが身なりき — それも 知らず。

三

伊東の 山腹、さくらの 御寺、
松月院主の めぐみ ゆたか —
三界衆苦を 教へにのみぞ、
その實、嘗めしは 海のながめ。
相摸の 灘さへ 平らに 霞み —
白帆の 孕みし 兒かも — われは

あさゆふ 讀經の つとめを 盡し、
楽しく わが師に つかへたりき。

四

夜ごとに 持ち出す 妙法華經、
柔和の 御言葉 序品 講す。
われ、その 御聲に 有結を 拂ひ、
諸漏なき 阿羅漢、時に 現す。
沈思の 彼岸に 至れる 魂は、
されども、斯くて ぞ つゞかさりき。

或時、あはれや、悪夢の 如く
わが身の 昔を 知れば、無特怙。

五

忽ち、胸にも おほ浪 立ちて――
わが身は わが師の 賜びし 名なり――
海音、どよみて 狂ふは 血しほ、
ひそかに 念じて これを 喝せど。
たとへば 佛あり、迷へる 衆生
そこばく 百千 浮ぶ 如く、

悲痛の數々、俄かに湧きて、
わが寂しきこそ深く覺むれ。

六

今年、殊なる彌生を迎へ、
わが師の親しみさらに増しぬ。
父とも思へば、失せにし母の
遠きに住してわれを呼ぶか。
あさ起き出づるや、御墓に詣で、
はじめて名乗るもなみだばかり――

時しも、かたへに櫻の一枝、
わが名を語りてゑめる女あり。

七

渠、その初子を土中に吞まれ、
苦愛の絹糸に引かれ來たる。
朝なり――あらたの光も添ひて、
御手なる花には露を帯びぬ。
その優言葉に、久遠の慈母も
斯くやと、わが脈天鼓の如く

おのづと 折ちては、ぬくもる はだへ、
血しほ は いつしか 逆に のぼる。

八

世尊の 方便、薬も 美味も、
この毒 受けては ちから 具せず。
戀慕は 乃ち 渴仰 なれど、
かの女 は 人妻、われは 孤露 ぞ。
日々、障子の かげ より 見れば、
夢路に 咲き行く 普賢菩薩 —

ああ、その 静散る 薄くれなる の
一瓣を なりとも 門に 追はん。

九

仁王の 力味も、無形の 魔鬼を
防ぐに 由なき 春の 精舎。
戀ゆえ ならば ぞ、わが 撞く鐘の
ひびきは 笑ひて 照らす 境。
聳ゆる 御寺の 柱に 寄りて、
如来の 香爐の ぐより 聴けば、

おどそかなるかな、わが師のおもて—
聖なる寂しみ熱く涌きつ。

十

暗きに燃ゆるはうつゝか夢か、
まなこを閉ぢても開らく堂宇。
左右の柱は照り輝きて、
その火は巨龍の欄間つたひ、
ほのほの舌もて讀經のつくろ
焼くよと見る間や、聲を擧げず、

戀しのすがたは眉間に現じ、
御經をさゝげてわれを招く。

ダナエー獨白

(シモニアリスの作なる輓歌断篇)
の面影を偲びて、新たなる作れる

父に追はれて、ダナエーが
その隠し兒と波のうへ。
あまつゼウスを箱ぶねに

あこがれ 渡る この戀 や。

乾ける 土 を 盛りたる 身、
沸き立つ 潮 に ひたりなば、

解けて、 碎けて、 おのづから
抱き兒 の 寐がほ 見えまじを —

闇と あらし の 迫り来て、
安きは 所天 の かたみ のみ。

あはれ、 不安 と かなしみの
火もて ほてれる わが目 には、

海 の ちからの 高どよみ、
遠く 燃ゆる を 見し こゝろ —

ああ、 神 ゼウス 身に 觸れて、
もろき いのち は 見えそめぬ。

もろきいのちの見えそめて、
朽ちぬ榮えぞうらみなる。

ああ、燦爛や、天の座は
高きとよみに乗り來たる。

この兒を受けて、おほ御つま、
御座のほとりにそだてしの、
なが常聖の血すぢをば

アハヤの勇者たらしめよ。

朽つる宿世の身なれども、
こゝにせめてのぞみあり。

聖き榮えの照らす間ぞ。
このまぼろしの見ゆる間ぞ。

まことの闇よ、いざ、さらば、
その手を延して來れかし。

うらみと 歎き、死と つちを
この はこ船に くつ返し、

深き ひゞきを つたひ来る、

熱にぞ われは 燃え あがり――

ほのほと 成りて、まのあたり、

戀しの 神に したがはん。

死 獣

御星の 定めよ、か深き 森の
樹の間を 漏りては、ああ、その 死毒、
聲なき 雨と や 射そぐ、征矢の
一つに 當りて 手負ひし 雄猪。

ひそめる 生の火 忽ち 燃えて、
まろぶ は 奇し魂―― 怒りの 火焔

あらゆる 力を まなこに 籠めて、
真やみの 小洞を 逸りてや 出でし。

あま聳り 立ちけん 火ばしら、根より

折れたる いきはひ、いち時は 真晝。

風切る 響きを 暗きに 引きて、

ま直ぐに 駆け来つ 開けし 枯野。

草木の 觸るゝを 熱れに 焼きて、

はてなき 大地を たゞ 馳せめぐり、

御空に 輝く その 星々の、
かしらに 迫ばまる 苦をこそ 堪ゆれ。

おのれと おのれの 苦悶を 握り、

獵師を 離れて 叫びは 悲し。

いのちの 驅り輪 次第に 狭く、

その身を かこひて つひに や 逝ける。

ゆふべの 戦ひ 破れし 武者の

あしたや、 死の床 しら露 ひとつど。

牙齒 持つ むくろ の 毛 も 逆立ちて、
見よ、その 威嚇 は 小夢 と 冷えぬ。

人肉狂賣

「肉 を 買へや、赤き肉 を、
われは 娘 の 肉 を 持てり。
肉 を 買へや、人の肉 を、
われは 娘 の 肉 を 賣らん。」

「あはれ、翁よ、その籠に
盛りたる 肉は 生血 垂る。
いかで、翁よ、そを 持ちて、
人の 子肉 を 賣るといふ。」

「遠く 放つ 砲 の 弾丸 に、
子等 は 打たれて 早く 亡び、
近く 寄せし いくさ人 に、
妻 は 犯され、耻ぢて 死にぬ。」

「清の國に政治あらず、

民は野に伏す獸の如し。

利器を夷狄運び來たり、

あはれ、自在に狩りて暮す。」

「さらば、そが爲め、生き残る

娘や切りて賣らんずる。」

「さなり、家のうさぎさへも、

擁くその子の數を計へ、

子等の日々に減るを見ては、
残る一つを食ひ隠す。」

「それは毛物よ、人ならば、
稱ふる道のあるべきを。」

「正義何ぞ、平和何ぞ、

われに何等の致すあらず。

北京政府弱きばかり、
かれ等おのれの威をば振ふ。

「肉を 買へや、赤き肉を、
われは 娘の 肉を 賣らん。
いまだ 曾て 穢れなきを、
われは 殺して 刻み持てり。」

「なれは 狂へり、いざ、今を
行くべき 方に 従へや。
こゝろ 求むる物 あらば、
來りて 告げよ、わが陣に。」

「既に 愛しき 妻子 あらず、
のがれ 行くべき 穴も 失せぬ。
飽くを 知らぬ 他國人に
之し 與へば われは 足らん。」

「肉を 買へや、赤き肉を、
われは 娘の 肉を 持てり。
無辜の 民を 屠る 上は、
人の 肉をも 來り食へ。」

「來れ、狂者よ、その口を
つぐみて われに 從へや。
いかに 狂ひて あればとて、
わめきて 泣くを 許されじ。」

「何ぞや — 野邊を 走る水の
光る つるぎに 身をも 召すや。
肉を 買へや、赤き肉を、
さらば この身も 共に 行かん。」

凱旋兵

「吾子よ、あはれ、八幡
無事に 歸り 來し か」と、
母が 熱きなみだの
顔は 消えし その跡 —

「われも 母ぞ、うらみや、
愛しき 娘 失せたり。」

清き肌は裂かれて、
耻ぢに陰府に寄せたり。

「思ひ知れ」と、苛責の
杖は重しその都度、
燃ゆるまなこありあり――
これぞ秘せる家づと。

「君よ、あはれ、金比羅、
つゝがなくて斯くや」と、

妻が籠むるなさけの
姿消えしその跡――

「われも妻ぞ、うらみや、
ちからなくてこの罪、
戀ふる人を隔ちて、
こゝに陰府のわび住み。

「思ひ知れ」と、苛責の
聲は近しこの褥、

闇やみに満みつる密事ひそかの
悔くひぞ深ふかき胸底むね。

むしろ毛物けものなりせば、
それも常つねの快樂くわいらく。
なまじ勝ちかちに狂くるひて、
餓うゑるを満みてし罪惡ざいあく。

劔けんを抜ぬかば、まだしも
血液けつりと朽くる小あし手て、

弱よわきまゝにひそめて、
墓はかに追おひしおもひ出で。

心しんの臓ぞうにからみて、
無む辜この民たみのわざはひ。
雨あめの肺はいにすがりて、
無む垢くの娘等むすめらの歎なげかひ。

砲たうの陣ちんは、黒烟くろけむ
消きゆるまでの込こみ合あひ。

これは、血の輪 つぶつぶ、
刻を きざむ 戦ひ。

火矢の なやみ 頻りて、
敵は 胸の 奥 なり、
かしら 觸る、枕 に、
こゝろ 責むる 聲 あり。

ひとり 覺めし 夜中
夢は 残す 人妻、

ほてる 目を ば めぐりて、
正面に 照らす 胸隈。

強き 神を 脊負ひて、
われに 放つ 矢の 數 —
荒れて 廣き 心野 に、
渠女は またも 叫けばす。

刹那 毎に わが身 の、
死を ば 受くる 苦しみ。

愆^{とが}を断^たつに從^{したが}ひ、
罪^{つみ}を悟^{さと}る悲^{かな}しみ。

この身^み、粉^{こな}末^まに碎^{くだ}くも、
一^{ひと}つ毎^{ごと}に口^{くち}あり、
わが血^ち、石^{いし}にこほるも、
ひと輪^わ毎^{ごと}に耳^{みみ}あり。

かの女^{ぢよ}逃^にぐるその時^{とき}、
おほひ得^えたる衣^{きぬ}なし。

斯^かくぞわれも追^おはれて、
隠^{かく}れ行^ゆかん空^{そら}なし。

いのち外^{そと}に拾^{ひろ}ひて
歸^{かへ}る道^{みち}の萬^{ばん}歳^{さい}、
暗^{くら}き室^{むろ}にわが身^みを
今^{いま}や呪^{のろ}ふ生涯^{しやうがい}。

朱のにじみ

あはれ、翁おきなの入れ墨師、
しがめる顔かほに目は燃えて――
闇やみにはあらねども、
掟おきてに反そむく暗くらき室しつ。

身み投げ娘むすめのおもかげを
小針こはりの尖さきに思おもひ出いで――

若者わかもの面壁めんぺきの
脊せなは、衣きぬなき玉たまの肌はだ。

衣きぬなき脊せなは、妹いもうとを
きざむにつれて、痛いたみ行き――
斯かくても、『わが脊せよ』の
戀こひしき聲こゑは聽きゆなり。

失うせにし人ひとを追おふ罪つみの、
樂たのしき胸むねをいだきつつ――

恐ぶ は 戀の苦か、
まさまざ 浮ぶ 阿鼻地獄。

「父よ、お房の罪業は、
斯くてわが身に引き受けつ」
翁は答へなし、
ただ差す墨の匂ふのみ。

靈ある 針の走り彫り、
成れる 姿は活き活きと――

裸形の女神なり、
情には満つる 肉付きや。

目蓋と口に朱を入れて、
さながら元の兒は生まる――
翁は睨み詰め、
「淫婦」とばかり罵りぬ。

兄はその頸ふり向けて、
若き血しほぞ亂れける――

口づけしたる者、
父の眸に燃えて見ゆ。

あけはにじみて脈に散り、
心狂ひて息絶へぬ――

翁は怒りつつ、
おのが喉笛つき刺しぬ。

叙事
歌曲
黄金鱗

一 六部姿

鞍馬山 さか路をくらみ、
星あかり 樹の間を漏れず、
そびえ立つ 絶壁のうへ、
谷深き 闇に臨みて
耳澄ます 六部のすがた。

草も木も眠る深山や、
夏の夜の風は高ぞら。
寂として、森のしたゝり、
滴々と落つる響きを
底までも立ちてや聽ける。

あるは、又、遠吹くあらし、
おほ楠のほづ枝に當り、
その枝と戦ひ過ぎて、
いま更に共に語らひ、

山津浪起すを聽くや。

あるは、又、つけ狼の
岩が根を傳ふつま音—
さりとは、いともいぶかし、
脊なる厨子下におろして、
「人あり」と闇をのぞきぬ。

二 わが兒

「ああ、されば、この谷の底、

なれば 今 棄て兒に 等し。
年は まだ 二七の つぼみ、
持て 嘸す 花 とは 成らで、
咲き出でし 遺傳の やまひ。』――

「その病 癒す 爲め なり、
「しばらく」と 母が 御言葉。
四五日の 備へ 給ひて、
十日 こそ 既に 過ぎつれ、
身は こそ 縛られしまし。

「約束の 迎へ 來らず、
わが心 うれひに 堪へず。
起たんにも からだの 繩目、
たゞ 手ののみ ゆるみ 残れど、
わが口 に 運ぶ 糧 なし。

「われや、かの 病める 瘦犬。
かへり見るもの なくも、なほ
家戀し、山は おそろし。

さればこそ、聲を限り
に
日を叫び、夜を歎きつれ』

「うべや、なれ、いつこの子ぞ」と、
問ふ六部、答ふるをとめ。

「わが家は——語るもつらし——
大阪の薬師なれども、
今は京、鴨川づゝみ——

「四條橋、人こそ通へ、

うはべのみ映るその様
川水と清きをきそひ、
世はすべてつれなくあれど、
母のみはしかあるまじを——』

「さて、父は如何なる人」と
問はれては、たゞ涙のみ。

「ああ、君よ、父ありけれど、
五六年母に去られて、
その故をわれは知らじな。」

「大阪に――もとは薬師の――
その父の里を知るや」と、
かれ、今やすまひ正せば、
「うはゞみの鱗取りなり、
大峯の奥に」とをとめ。

「さればなり、わが娘よ」と、
手を投げていただき締めたり。
「なが母はわが連れ添ひぞ、

十年の仲を棄て、又
いましをも滅ぼさんとす。

(をとめ子は驚けるのみ。)
「聴け、しばし、かれはつれなし。
斯くまで知らざりけるよ、
人の忌む因果のやまひ、
おのれのみ隠さんとして。

「その昔、われは國栖人。

三上さんじやうの奥おくに笛ふえ吹き、
うはばみの眠ねむりを覺さまし、
味噌みその香かに之これを招まねきて、
黒くろがねの柵さくを卷まかせつ。

「七重ななへ、八重やへ、かたき圍かたみを
やすらかにその柵さくのうち、
なまぐさき夜風よかぜしのびて、
金色こんじきのうろこ取とるわざ—
樂たのしきは、戀こひゆるなりき。

「癩病らいびやうの藥くすりなりとて、
こを賣うりに齎もたらす毎ごとに、
かねよりも、はた器具きぐよりも、
なが母ははの若わかきすがたを
目めに映うつす、これ、さちなりき。

「三さんとせ覺さめ、三さんとせもだえて、
町人まちびとの口くちにもほり、
わが思おもひ叶かなひて見みれば、

その薬服するものは
戀ひ渡るわが妻なりき。

「斯くてしもなれは生れて、
十までは無事に育てど、
子にもそを飲まし置かん
と、
われをまた山に遣はし、
その跡にかげを隠しぬ。

「無情とや、罪とや云はん。

(子のかほの壞れは揺りぬ。)
「されど、わが長の戀人、
この數年、行くゑ尋ねて、
信もなき行者のよそひ。

「わが里の深き森かげ、
黒がねの柵に寄り來て、
味噌の香を聴くうはばみや。
その如身を削られて、
なほ、われは戀を追ふなり。

「あるは、この山をひと越え、
あなたなる縁者にもやと、
夜をつぎて坂路を來たり、
なが聲を聞き得たるこそ
望みある手づるなりけれ。」――

「ああ、父よ、なつかしきかな。
この上は、憎まるゝとも、
母に行き、母と住まはん。」――

「愛しき兒よ、とく谷を出よ。
負ひ厨子に入れて運ばん。」

三 負ひ厨子

「ああ、などか見るも物憂き、
五とせを古りしこの厨子。
古りにしは五とせなれど、
之を負ふ行者のよそひ、
戀に酔ふ靈には添はず。」

「ああ、などか 見るも 物憂き、
五とせ を 古りし この厨子。
古りにし は 五とせ なれど、
百とせ を 戀ひも 渡れば、
とこ若 の 心 に 添はず。

「ああ、われは この厨子 負ひて
古り行かん 身 ならざりけり。
その 重み いと 軽らぎて、
わが體 は 血しほ に 踊り、

わが心 いのち に 溢る。

「最早や われ 六部 に あらず、
いつはりの 行者 に あらず。
信仰 も 爲さぬ もの には、
法華經 の 一部 も 何ぞ。
佛像 の 薰び も 何ぞ。

「戀 のみに われは あこがれ、
その戀 を またも 得んとす。

失^うなひしものを求^{もと}めて、
それ^それにまた行^ゆきて會^あひなば、
重^{おも}き物^{もの}すべて無^なれや。

「闇^{くら}照^てらす力^{ちから}もなく、
觀^{くわん}世^せ音^{おん}、谷^たにころげよ。
その底^{そこ}に千^ちとせを消^きえて、
なほ恨^{うら}みありとし云^いはゞ、
愛^{あい}しき兒^この身^みがはりとせん。

「來^きたれ、兒^こよ、すでに、この厨^{くし}子^し、
經^まくさき箱^{はこ}にはあらず。
五^いとせを戀^こいのぬくみに
あたゝかき胸^{むね}のうちなり―
なれを乗^のせ、母^はに運^はばん。」

四 絶望

鴨^か川^がの水^{みづ}いと清^きし。
あさゆふの夏^{なつ}のながめや、
よしあしの映^{うつ}るまゝなり。

されど、かれ、晝をい避けて、
夜こゝに厨子をおろしつ。

左右への観音びらき、

出で来しは菩薩にあらず。

「父上」と、西をゆび差し、

「かしこなる堤のひかり、

それぞわが母の圓窓。

「わが身先づ告げ來たらん」と、

その庭の垣根を入りて、

をとめはもおどろきにけり――

おのが身を山に運びし、

その人は母と酒ほぎ。

「けふをまた酔ひてつぶしぬ――

いろ戀の深きを見ても、

實にわれは京の染め屋」と、

紺染めの手はかきいだく

白玉のほそき腕くび。

「こよひをばこゝに送りて、
あすはまたよその花染め——
わが包む兒をば如何に」と、
白き手を邪険にもぎて、
母の顔窓に向ひぬ。

かげなるはかしら引き込め、
その答ひそかに聽けば、
「世の戀に兒は付き物ぞ。」

生れなば、また棄て去りて、
なが見目の若きをめでん。」

をとめ子は驚き怖れ、
川ばたに走り來りつ。
「父上よ、如何でしのばん。
われは、かの谷に歸りて、
死ぬべし」と、泣きくづほれぬ。

「左まで母、無慈悲にあらじ。」

われ、之をなだめやらん」と、
いけ垣を 入れば、聴ゆる
うらみ聲、「なれこそ 憂けれ、
遺傳をば 人に 隠して。」――

「そは つらし。よし 隠すとも、
知らるれば、かの兒の 如し。
その父の 國栖の 山人、
うはばみの うろこ取りをも
とく 棄て、なれを 戀ふなり。」――

「その戀も、黄がねの うろこ
飲まざれば、腐る日 あらん。」――
「いな、われは 飲みに 等し、
身も 魂も 斯く 燃ゆるを」と、
相いだき、口 相吸ひぬ。

うろこ取り、ただ 怒るのみ。
之を 避け、歸り 來たりつ。
「愛しき兒よ、われは 二たび
大和なる 深山の 住まひ、

森の香を寧ろしのばん。――

川ばたの観音びらき、

また人の菩薩を閉し、

その父の脊なにも負はれて、

行く道のうらみも重く、

深山へと闇を消えたり。

五 水晶洞

大和なる大臺が原、

森の香や深きに凝りて、

吉野川流れそめたり。

その岸をのぼり登れば、

梵字以て手引く洞あり。

その洞に入ること一里、

水晶の真中をうがち、

なほ奥に流るゝ大河。

黒水の響きも高く、

死の川の瀬にこそ似たれ。

地心より流れ來たりて、
地心へとまたも歸るか。
おほ洞のせまりたる底、
霽々と闇を振ひて、
その響に逃ぐる口なし。

この水に手足ひたせば、
手の先の痛みも亡び、
つま先の傷も癒ゆると、

あはれ、また、かたるの人は
からだをも浴びに來るなり。

國栖人の娘も、こゝに
全復のいのりは久し。
されど、かれ、壞れ増りぬ、
兒を棄てし母を棄てし兒、
父にさへやまひ移して。

あはれ、わが國栖の山人、

つひに この 御洞の あるじ。
うはゞみの 體を 振へど、
また 生ふる うるこの 如く、
朽る身に 戀のみ 光る。

その光 いや若やくを
形なき 手に あつめ見よ。
この奥の 闇に 供へて、
水晶の 壁に かがやく、
蠟燭の 火に こそ 勝れ。

身は もとの 六部に あらず。
つどひ來る 人を 計へど、
皆共に 顔は むらさき。
その數に 妻も まじりて、
兒の そばに ある をも 知らじ。

闇の盃盤終

二〇六

明治四十一年四月五日印刷
明治四十一年四月八日發行

闇の盃盤

定價金卅八錢
郵税金六錢

著者 岩野美衛

發行者 日高藤兵衛
東京市本郷區天神町二ノ廿五

印刷者 小西幸吉
東京市神田區三崎町三ノ一

印刷所 日本印刷株式會社
東京市神田區三崎町三ノ一
(電話本局一八四〇)



發行所

東京市本郷區
天神町二ノ廿五

日高有倫堂

安部 磯 雄著 (上製四百八十頁)

新刊 應用市政論

定價 壹圓廿錢
送料 拾貳錢

本書の論ずる所は都市の發達、市の立法及び行政、市區改正、交通機關、道路掃除、水道、瓦斯、電氣、公園、市場、家庭、衛生、教育、娯樂、財政等の諸問題にして、實に歐米諸都市の現狀を詳説せるのみならず、著者特有の識者を以てこれを我國の都市に應用せんことを企圖せり。一面より見れば經世家の爲に社會問題、經濟問題、政治問題の解決を試みたる特種の參考書にして、他面より見れば國民の爲に新奇なる都市問題を紹介したる市民讀本なり。

半井挑 水著

新刊 子寶

價郵 拾五錢
送料 八錢

愛あり熱あり單へに情を以て寶とせる才子佳人を經とし血なく涙なく唯愁を以て寶とする紳商母子を緯とし、産み出したる一雙の子寶、身來つて世を瞥しむべく、讀去つて人を訓ふべし。

小川 芋 錢著

草汁漫畫

定價 金五十錢
送料 金八錢

古人曰文章拙を以て進み拙を以て成ると芋錢子の畫は則太拙なり其謂ゆる妙想奇致なる者も則拙中の一味に過ぎ雅致の士莫くば一本を購ひて清賞を賜へ。

田口 掬汀氏著 (清方畫插畫三枚)

小説 追

恨

定價 金壹圓
郵稅 貳錢

之れ著者半歳の勞苦を積みて成れる雄篇也、情趣に富める青春の男女を中心として、現代社會の缺陷を描く。靈活暢達の筆、心奥の幽を短き人事の微を穿ちて、人と共に眼前に躍動す、著者が半平たる勢力を文壇に有する所以此書を讀みて知るを得べし、裝釘の美を凝らせる四百二十頁の大作、分量に於て坊間驚くところの書二冊を越ゆ。

伊藤 銀 月著

小説 出潮

定價 六拾錢
郵稅 拾錢

時代を描き、時代の人を描き、時代の生活を描き、時代の寫藤を描く、極めて眞摯に、極めて深刻に、且つ極めて妥當に、文章亦平淡の裡に秀潤を包み、著者の或一面を最も遺憾無く發揮せり、之を讀む者必らず其血を沸かし、胸に新潮の昂げ来るを覺ゆべく、而も讀み了つて頭に何物の残れるを認め、怡然として獨り満足せん。伊藤 銀 月編

近刊 机上圖書館

一冊廿錢郵稅四錢函入三圓五十錢十冊完結漸次刊行。本書は漸次に刊行して都合十冊に至りて完結すべきもの男女老少何人も好參書良師友たらんことを期す。完成の上は「机上圖書館」と表記したる雅致ある箱に收め、座右に備ふべく、苟くも書籍に趣味と實益とを求めんとする時之を開けば各人各別の需要を満たすべき原料を此中より見出すこと容易に實に坐ながらにして圖書館に入る。同一の結果を得ん、豈空前の有用書にあらずや、但し

書名及び内容の各別と其發刊の順序とは追つて之を廣告すべし。

伊藤 銀 月著 小杉未醒畫(挿繪十枚)

新譯 水滸傳

水滸傳は支那の叛骨養成書也其革命經也風雲轉た急にして革命の火氣大陸に鬱積する今日、本書は新に出でたる物の如く時代の人に歡迎せらる、朝鮮より延いて支那をも我と混一視するの抱負ある日本男兒は必ず之を讀むべしされど馬琴蘭山の舊譯は唯だ其皮相のみ銀月君が言文一致の斬新なる譯文成りて原著却つて顔色を失ふを見る未醒君の挿畫と相俟つて現代第一の奇書！

田口 掬汀氏著 製本優美

小説 獨木舟

定價 金四拾五錢
郵稅 金六錢

一枝の彩管を鑿となして喬木に比ぶべき社會を刻せる獨木舟は千椽屋態の痕跡を印して、文海の潮に浮ばんとす。理性の閃めき無情の影、交互錯綜して究むるところを知らず、一痕に、痕の味あり、一跡に一跡の趣あり、人情の活動に甚深無限の教訓を聞かんとする者は必ず此書を讀まさる可からず、敢て江湖の清鑒を待つ。

獨逸哲學博士ドイセン原著 高橋五郎譯

古今東西 哲學通解

哲學は其範圍の濶大其問題の夥多其意義の深遠往々學者をして絶望の叫聲を發せしむ適ま少數之を究むるや忽ち厭世悲觀に陥りて往々自殺に安心を求めんとす然れども之れ哲學の十分領會せられざるより生ずる弊なり茲に獨逸の哲學者ドイセン博士は哲學に於ては古今東西を窮め就中印度哲學の蘊奥を究め純正哲學美學及び倫理に三大別して詳密に哲學の大體を描寫し哲學の何物たるや氏はに至りて初めて萬人の領會する所となりぬ高橋先生該書を翻譯し幾百萬の哲學志望者を満足せしめんとす

德田秋聲著 (上製美本)

近世 小母の血

定價七拾錢 郵稅拾錢

此篇題して「母の血」と云ふ。抑も如何なる母の血を享けたる。汚血か、毒血か、將た惡血か。著者の靈筆に描出されたる幾種の人物と共に此の一大雄篇は成れり。秋聲子が一年有餘の苦心に成れる新作は是なり。

齊木仙醉對佛國神學教授ボア博士

三位一體論

定價貳拾錢 郵稅金四錢

海老名氏對植村氏の三位一體論争は一時宗教界に大波瀾を生じたりき神秘的なる此の問題は未だ解決されたりと云ふべからず、齊木仙醉氏は萬國學生基督教育大會に公開狀を發して教會神學の三位一體論の誤謬を縱横に論議せり大會側にては佛國ボア博士之に答辯せり、斯くて兩氏互に駁論す、自稱預言者なる齊木氏勝つか、正統派の大家ボア氏勝つか、讀者之れが行司となりて孰れに團扇を擧ぐる又妙ならずや

高橋五郎先生著

近世 英語實驗百話

定價卅九錢 郵稅六錢

高橋先生英語に於ては徹頭徹尾獨學を以て之が蘊奥を究め内外人をして均く舌を捲しめ高橋流の當時術を繰述し聽者をして塵埃を打ち快く叫ばしむ加藤其百話たるや乾燥無味の術語に非ず形容無盡奇趣眞に横生す加ふるに世界語の比較論及異同辯を以てしエスメラント外に一層新らしき世界語迄も存在する事を説きたり實に新好著と謂はざる可らず青年諸氏の好指針 教員諸氏の好參考何人も欠く可らざるの良書也

田岡嶺雲著

新 霹靂鞭

價四拾五錢 郵稅金六錢

文壇の革命兒嶺雲が滿腔の不平は終に自ら其肺を爛らし今病を瀕戸内海白沙青松の間に養へりと雖ども元氣猶毫も衰へず茲に渾身の心血を傾げ盡して一書を著はす題して霹靂鞭といふ、收むる所「近松の心中物」を初めとして數十篇悉く時代に反抗し文明を呪詛する著者が眞情を眞寫せるもの世の浮華輕佻なる當代の文學に懺悔たる者は來つて此の、世と相容れずして三十九年を四海に放浪し餘命甚だ長からざる天才者が焔と燃ゆる熱烈の言を聽け。

田口掬汀氏著

新 悲劇熱血

定價一拾錢 稅金六錢

此書は掬汀氏が伊井荅峯一座の請ひを容れて特に執筆せられたる脚本なり、脚本欠乏の弊ある今日此書が劇壇の要求に副へる事言を俟たず又單に讀物として見る。優れたる小説に等しき興味を興へん。

川上眉山著(頁數三百卅頁上製頗ル美本)

新 觀音岩

定價八拾錢 郵稅拾錢

江湖の喝采を博し、文壇爲めに騒然たりし前篇は、社會に對する暗闘の一半を描きたるまゝ、讀書界に其後篇を渴望せらるゝ事已に一歳、今茲に此篇成りて明治文壇の一大傑作遂に全し、請ふ愛讀の榮を給へ。

小栗風葉著 (美術的製本)

新 小新粧

價四拾五錢 郵稅金六錢

或は美人の粧を凝らして翠帳を出で、或は壯夫の劍を按じて陣頭に立つ、彼に麗情あり、燭を秉つて夜見る海棠の花、此に雄姿あり、雷雨忽ち去つて皓月中天に懸る高幅の綺、風葉子が文壇に盛名を馳する所以のものは、實に此新粧あるを以てす。

大町桂月著 (製本美)
代表日本人
 定價八拾錢
 郵税金八錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらすして事實也。歴史也。國體也。祖先の發達せる國民性也。我が國には儒教佛教以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今更言を待たざる所なるが武士道の真相を知らむとせば理論のみにては不十分也之を人物事實に徴せざるべからず此書日本國民の特性を發揮せる人を擇びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國民の歴史也兼りて道德經也。

文學博士 桑木嚴翼著 (總クローヌ製本美)

性格と哲學
 定價圓廿錢
 郵税金拾錢

本書は高妙なる哲學宗教の問題より學近處世法並に女子問題を解釋し其他戯曲文藝等廣大なる範圍に亘り政齊慎重なる評釋を下せるものにして論理の井然たる文章の精采ある誠に學界の珍書たるを失はず好學の士は本書の教訓に依り必らず啓發する所多きを信す。

大町桂月伊藤銀月刪修天籟篇
文士寶典
 定價五拾錢
 郵税金六錢

東西諸文星の名篇玉什を襍め更に之を嚴密なる審美眼を以て、不朽の文字のみを撰擇し、文勢を保ち神韻を失はざる、繁簡の適度に於て、緊密に取捨按排し、文士並に文士たらんとする人の爲に、最良なる一巻の完備せる理想的資料寶典を編纂したる者也、之を繕げば、深刻腸を抉ぐる者、天衣無縫なる者、香氣齒頰に湧く者、奇句警語懸接に違あらず。

小栗風葉著 鍋木清方畫 (上製本美)

小説 **十七八**
 定價七拾五錢
 郵税金十錢

櫻は三月當浦は五月女盛りは十七八げに少女は人生の花なり而して少女の可憐なる心事と態度とは唯だ多情多恨の才子よく之を描き多情多恨の才子よく之を愛讀す風葉先生の濃麗筆を味はんと思はる、大方の君子は請ふこの篇を讀まれよ。

網島梁川譯 (製本美)

近刊 **ルナン耶蘇傳**
 定價一圓五拾錢
 郵税金十四錢

此書教主生涯、其懐きし神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論ふ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀社會主義觀また此間、隱見す、自由詩究の精神一貫して批評の鋭及觸れざる所なく、之がため一時歐米基督世界を震動して顔色失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶穌の位置は寧ろ之によりて確められたりと言ふべきなり梁川先生は關綯瑣麗、現代獨歩の筆を以て此書を翻して世に問はる。世界の認めて耶穌傳の白眉となすものと模範的美文とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也

川上眉山著○清方畫 (上製本美)

三版 **觀音山石**
 定價八拾錢
 郵税金拾錢

同情 豐富 文致 清麗
 思想 高逸 裝釘 美麗
 これ本書の特色也。

大町桂月序 有倫堂編纂

再版 **明治大家文集**
 定價八拾錢
 郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず今一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易の事にあらずこの書論文といはず美文といはず小説といはず荷も文章を以て一家をなし特色を有せる文章を撰びまた文章の特色を發揮せる名篇を撰び明治の文章家を集めて此の書にあり之れ明治文學の縮圖にして一讀の下に以て明治の諸大家の面影を伺ふべく々壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人ありては以て眞模範とするに足る有益にして且つ興味ある良書なり。

櫻庭篁村著 ○鍋木清方畫 (上製本美)

三版 **小不問語**
 定價金七十五錢
 郵税金十錢

(附 大詩人出現 鹽原遊記)
 竹裏の蟬餘地仙と化して氣を吐くこと虹の如く簾中の彌二郎亮鐵砲を發して僅に雀を驚かす、しかれども其光り天に沖り、其響き地を動かす、これ著者の手裏にあらずして其の不問語なり。

綱島梁川著 (菊版總クローヌ頁數約千頁)

梁川文集

定價 二圓廿五錢
郵稅拾五錢

梁川綱島先生高邁博大的識、精微理到の言、恰も燭を把つて照す如しされ、先生談理是れ能とする學者、非ず一面冷靜細微の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天地を戀ひ此戀を混へて日夜に冥想し日暮に修養止まざる哲人の解脫の人も、理を講ずれば簡淨にして靈活感興を遣れば深遠にして豊麗其想獨特、其文獨特、然一家を成して現代思想の一角に、く可らざる自家の館を占めて安んじ他人の追従するを許さず是れ筆に非ずして人格なれば中弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

海老名彈正先生著

基督教本義

上製六五錢
並製五五錢
郵稅金八錢

基督教の本義果して如何之れか明白なる解答を與ふるの古來宗教史上に光明を放てる豫言者教師教祖の抱懐せる思、經驗、依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓抜の識勇健の筆を以て上げモーゼよりトはルイテル、シユライエルマツヘルに到る迄正確、偉人の悟得を明かにし新教の本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の榮を賜へ。

大町桂月著

わが筆

定價 金四拾五錢
郵稅金六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は洒脱に或は沈痛に或は眞面目に或は詼諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校會社及び文學等に關する卓見到る處、充ち才情揃すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の快文字也

泉鏡花著○清方畫 (上製美本)

小無憂樹

定價 金八拾五錢
郵稅金拾錢

若者積年の思を籠めて、はじめより單行一冊として新に筆を取りたるは、此の編を以て嚆矢とす、願くば紳士淑女をして良匠が彫心の經營に成りて、世に美しき戀を秘めたる一大宮殿の裡に遊ばしめむ。

文科 夏目先生校閱 チャールス、ラム著
大學 上田先生序文 文學士 小松武治譯
講師 ロイド先生

沙翁物語集

定價七拾錢
郵稅金拾錢

本書は沙翁戯曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を抜萃し精緻なる翻譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附録を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戯曲の何たるやを窺はんと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべき也。

匿名隱士著

破天入論

定價參拾錢
郵稅金四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書、本書の出づるや全國各新聞雜誌、大好評を博し今や第八版を發行せり以て本書が如何に愛讀せらるゝかを知らべし。

文學士 久保天隨著

紀行 山水寫生

定價 金四拾五錢
郵稅金六錢

天隨氏の紀行文は、世すでに定評あり。泰華を眼前に仰ぎ、溟渤を脚底に湧かしむるもの、これ其文の特色にして、決して他人の模倣を容れざるものとす。本書收むるところは、長短無慮二十餘篇、その地を以てすれば、南鬼界の天に臨み、北蝦夷の境を踏み、實に著者帳中の秘たるものなり。造化の工を讚賞し、天地の美を景仰するもの、机上の書なかるべからず。

大町桂月著

我が文章

定價 金四拾八錢
郵稅金六錢

桂月先生の文章愈々熟して縱横自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落飄逸に神闕にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情、溢る文此にすれば聖なり先生の文の如きは、實に當代の逸品なり

饗庭篁村著 ○清方畫 (上製美本)

再版 小説 竹影集

定價 金六拾五錢 郵稅金拾錢

戀と慾との二筋道誰かは踏迷はぬ者あるべきその好き道しるべの「虚空塵」情義うるはしく花あり實あり血あり涙ある「山懐」前者は理情兼れ深く後者情趣偏に拘すべし著者が益る、計りなる同情は如何なるものをも照さで止むまじく見えて嬉し

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼

定價 金四拾五錢 郵稅金六錢

博大精該の才識を以て、不偏不黨、文壇の趨勢を論斷し、毫も顧慮するところなきは評論家としての著者の態度なり、その問題は文學・史學・宗教・道德の諸方面に亘り虬龍の片甲、なほ能く雲を成す、一巻收むる處、凡そ七八十篇長短錯落、理致あり、情趣あり、眞個人間に稀見るの好文字、

伊藤銀月著

社會研究 高原生活

定價四拾錢 郵稅金六錢

嶄新の思想奇創の文字を以て文壇を風靡せる銀月君、就中社會と人間とを觀察するに於て別個の眼孔を有すと稱せらる、此書最も適切に君の長所を發揮せるものにして、富士の裾野と人間生活との關係の現在及び將來を、非凡の才力を以て描寫し出だす、實に是れ絶好の題目にして當世未だ見ざるの珍書、社會と人間との新なる研究法を教ふるもの也

大町桂月著

家庭と學生

定價 金參拾八錢 郵稅金六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを斯くは、しつりむ、我れも斯くは覺悟せむと心に期するのみにて能く實行せむと斷言し得べき身の上なられど家庭教育の大切なこととを今更のやうに感じて愚者の一得もやとの世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前にも呈する也

徳田秋聲著

小説 花たば

定價 四拾五錢 郵稅金六錢

此に美しく束ねられたる花の数は何々ぞ。紅白紫黄必しも剪綵の妙を悉さ、れども、清き自然の野趣は此の一束に盡きたり。全篇長短合せて十三章、總て作者獨擅の詩材にして、亦獨得の文字なり、秋聲子が眞技術と抱負を窺はむには、此篇を措て他に求むべからず。切に江湖の眞摯なる讀者の高聲を希望す。

大町桂月先生選

第四版 壹時代青年文集

定價 金四拾錢 郵稅金六錢

大町桂月先生選

貳時代青年文集

定價 金四拾錢 郵稅金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も懈らず爰に満天下青年諸子の傑作數千篇中より其尤なる者を選び厳正なる批評を加へて時代青年文集を編せらる收むる所叙事抒情あり論說書簡あり將た新體詩あり或は純爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし附録には當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

文學士 久保天隨著

再版 韻文 夕紅葉

定價 三拾五錢 郵稅金六錢

著者の美文は、潑墨の山水の如く、氣韵生動、豪宕の氣、筆端を繞り、かの蝶革を歌ふ底の軟弱文字に非ず。三生石、高遠城の如き、事すでに奇に、文亦た情、人をして、覺えず、起舞せしむ。韻文には、拔都征歌の歌、蒙古の大英雄を謳歌し、一唱腕鳴り肉躍る。壯大雄闊、大空を横絶するに似たるもの、唯だ本書に於て之を觀るべし。

饗庭篁村著

再版 紀行文 天下泰平

定價 金四拾五錢 郵稅金六錢

文章絢爛の極致に入り閑淡にして味深く眼前の景口頭の語自然に出で、沖淡深粹最も及び易からざるは篁村先生の紀行文也本書題して天下泰平と云ふ命題既に洒脱也中に收むる所悉く先生が輕妙老熟の筆致以て山水美人事美の意趣景趣を曲盡せる者也殊更に奇巧を求めざる紀行文の淡粹なる趣を味はむとする人士は請ふ一本を備へよ

大町桂月先生 中内蝶二先生合著

少女と山水

定價卅五錢
郵税金六錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて山水にあり山水の美や豪宕にして西瀟少女の美や優婉にして可憐蝶二君の文少女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月君の洒脱の文山水の幽趣を寫して雲烟紙表に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を縦にし高尚優雅家庭の讀物としてすべく文章の手本とすべし腥風血雨に惱める軍國の讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙の美を味ひ給ふべき也

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著

向上の一路

定價參拾錢
郵稅六錢

向上の一路に就かんと欲する者は此書を讀め我國に於て哲學的に社會主義を建設したるは此書を始めとす▲安部氏の駁論及著者の駁々論は益々新社會主義の本領を發揮し共に光彩陸續たり▲近時の一大著述にして情理該れ臻る者は此書より敢て江湖の讀書子に勸む

海老名彈正先生著

宗教々育觀

定價
金五拾五錢
郵税金八錢

基督教 三大綱
(其一)神觀 (其二)世界觀 (其三)人觀
宗教の明星として名聲天下に轟ける海老名先生は本書に於て教育問題に關する所信を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動するに足るものあるや必せり見よ先生が該博の識公明の論一讀人を快刀思想界の亂麻を截つて感らしむるも本書の内容は單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に對する先生最近の思想を發表せられたるもの實に濛々たる我邦思想界に於ける一大探海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目して見られよ

大町桂月先生序 角金潮聲著

宇宙と人生

定價拾五錢
郵税金四錢

宇宙と人生の問題豈常人の言ひ易き所ならんや茲に哲學者あり宇宙の幽を闡き玄を究め森羅萬象の生成變化の本源に溯りて人生の眞諦を内觀直視せんとす茲に前人あり天地の美 動真に肉滲して以て人生の本義を直觀捕捉せんとす本書は哲學者の想と詩人の情を文に綴りしもの古高の韻、艶麗の致、讀者をして三嘆せしむ宇宙と人生とを讀はんとする者は來りて本書を繕ひ

醫學士 佐々木多聞著

新化粧

定價四拾錢
郵税金六錢

歐米化粧術の粹を參酌し日本古來の化粧を折衷し拾四章に別ちて最も進歩せる化粧を説く通俗文章趣味ある研究美術的化粧を欲する者は此書を讀め化粧の節本として必ず一冊を備へよ世にありふれたる俗惡淺薄なる化粧書と同視する勿れ

醫學士 佐藤得齋著

美的衛生

定價
金四拾錢
郵税金六錢

著者一種の詩眼ありて、有ゆる天然人事の美を捉へ、専門の衛生學に配合調和し、熟練十二分、極めて美的なる衛生の新方法を唱導せり、一面より見れば、美的衛生は人間の生活を美的ならしめんと試みたるもの一種の美的生活論也、論旨の美、文章の美相俟つて、之を醫學界の珍とすべく、又文壇の奇とすべし

本居豊穎撰

紫文摘英

定價
金參拾五錢
郵税金六錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を要せず而も之を教科書に使用せしむるには餘りに浩瀚に過ぎ又事實上停倫の箇處多く女子教育家の齊しく遺憾とするところ源氏博士の稱ある本居先生大に之を慨し五十四帖を通じて其英を摘み去り最も聯絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」を編せらる即ち是れ源氏全篇の縮圖にして一讀其大意を窺ふべく併し紫文の妙は此上下二卷に盡くせり各種學校の良教科書たるは勿論荷も國文學に志あるの女士は必ず一本を備へざるべからず乞ふ高説の榮を給へ

半井桃水著 清方畫

小慰問袋

定價
金七拾五錢
郵税金六錢

硝煙彈雨の下に在りて勇將猛卒を樂しましめし慰問袋に戰時裏面の材料を収めて冷く讀者に分たんとする桃水氏が從軍土産

海老名彈正先生著

人道

定價金拾錢
郵税金二錢

先生時局に關し大に感慨するところあり其の豫言者的熱識を傾盡し集軍壯大萬丈の光燭を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元氣を鼓舞作振せんと欲す乃ち宗教家の戰爭觀を告白せんとす曾に軍國々民の必讀書たるのみならず軍隊慰問の好冊子なり

景山英子著

妾の半生涯

定價
金參拾五錢
郵税金六錢

大井憲太郎等と共に有名なる大阪事件に與せし女傑景山英子は即ち本書の著者也彼女の幼少が郷里の才媛として如何に譽高かりしか彼女如何にして大阪國事犯に與せしか在獄三年の生涯は如何なりしか如何にして情人と離れ如何にして良人を得たるか赤貧なる慈母として悲哀なる寡婦として多恨なる彼女の生活は如何なりしか本書は實に其典折波瀾錯節纏綿せる一箇の大悲劇を描ける也

泉鏡花著○清方畫

小哲之卷

定價
金七拾五錢
郵税金拾錢

これ鏡花先生があふるいばかりの同情を以て天と地と人に、訴へて同情を求め、初戀の詩篇也。

茅原華山編纂

我と人

定價二拾錢
郵税金六錢

本書は萬朝報の黒岩先生を初め諸家の談論文章を筆録したるものなり、柳は綠花は紅、是書を讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座するの感あるべし

デヨサイア、スツロング原著、石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒

定價三拾錢
郵税金四錢

本書は基督の福音教徒の使命並に天國の根本原理に亘り新解説を試み靈活剛健なる信仰を鼓吹せるものなり

萬朝報記者 茅原華山編纂

青年と詩吟

價二拾五錢
郵税金四錢

本書は茅原華山氏が各諸先生に囑して各々其愛誦する漢詩、和歌、新體詩、俳句を撰び編纂せられたるの書日夕此巻を抱いて誦讀せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

基督教講壇集

定價七拾錢
郵税金八錢

本書は眞に生命の麵麩靈活の根原たる現代基督教界のあらゆる大家の説教を網羅掲載したる雜誌講壇の全部を合し改冊せしものなり居ながら各大家の口演を聴聞する好冊子其内容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛讀の榮を給

泉鏡花著

小ななみと櫻

定價四拾錢
郵税金六錢

泉鏡花著○清方畫

小哲之卷

定價
金七拾五錢
郵税金拾錢

これ鏡花先生があふるいばかりの同情を以て天と地と人に、訴へて同情を求め、初戀の詩篇也。

茅原華山編纂

我と人

定價二拾錢
郵税金六錢

本書は萬朝報の黒岩先生を初め諸家の談論文章を筆録したるものなり、柳は綠花は紅、是書を讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座するの感あるべし

デヨサイア、スツロング原著、石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒

定價三拾錢
郵税金四錢

本書は基督の福音教徒の使命並に天國の根本原理に亘り新解説を試み靈活剛健なる信仰を鼓吹せるものなり

鈴木秋子女史著

軍國の婦人

定價廿八錢
郵税金四錢

再版 苦學社編輯

苦學の伴侶

定價
金三拾錢
郵税金四錢

横山筆助著

應用自在

定價參拾錢
郵税金四錢

成功したる催眠暗示術

接神術

定價廿貳錢
郵税金四錢

山口先生序 シルレル原著 齊木仙醉譯

日名家手簡

定價參拾錢
郵税金六錢

杉山先生書簡 黒澤辰三郎編

海老名彈正先生著

人

首

定價金拾錢

泉鏡花著○清方畫

小書

之

卷

定價
金七拾五錢

齊木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

定價參拾錢
郵税金四錢

加藤直士譯

トルストイの
日露戰爭觀

定價參拾錢
郵税金四錢

高橋五郎著

杜伯品藻

價參拾五錢
郵税金六錢

トルストイ伯の主義人物を評す

蘆風秋元喜久雄譯

四
獨逸
詩粹
紛紅集

定價廿五錢
郵税金四錢

文學士 小原無絃譯

原文
對照
バーンスの詩

定價三拾錢
郵税金四錢

文學士 小原無絃譯

原文
對照
シエレーの詩

定價
金三拾五錢
郵税金四錢

泡鳴著

新體
詩集
悲戀悲歌

定價廿五錢
郵税金四錢

泡鳴著

新體
詩集
夕潮

定價廿五錢
郵税金六錢

細越夏村著

新體
詩集
靈笛

定價三拾錢
郵税金四錢

秋元蘆風譯

獨逸
詩野葡萄

定價廿五錢
郵税金六錢

○原文對照の卷末に評註を附す

Small white paper fragment at the top left of the left page.

Handwritten mark resembling a stylized 'P' or '3' on the top left of the right page.

No. 6
31.1.25

Handwritten Japanese characters in the bottom left corner of the left page, including the character '女' (woman).